日本数学会ができたころ

福 富 節 男

数学会の年会と秋の大会とでは，プログラムの形式が違うことに気付かれた人は少なくないだろうが，なぜそうなったかを知る人はいないだろう．

編集部からは数学会ができたころのことを，またその苦労話をということだが，私にとっては突然の注文であり，しかも 50 年以上も前のことである．思い浮かぶのは，あれこれのエピソードにすぎない．いくらか筋道をたてようとしても，必要な資料はもはや，ほとんど存在せず，その当時の方々もほとんど物故された．幸い彌永昌吉先生がご健在で，日本数学物理学会（数物学会）が物理学会と数学会に分れた経緯や当時の日本の数学研究の状況などについては，雑誌“数学”や“数学セミナー”にお書きになっている．なお“数学”の第１巻第１号（1947年 4月）の会報欄に，公式の記録として「設立事情」が記されている．それも彌永先生の筆によるものである．そこで私に課せられたものは，事務に伴うあれこれということだろう．

１．定款作り，数学会の仕組の始まり

そのころの東大理学部１号館３階の大学院室が一つあった．戦前は大学院（旧制）に籍を置いている学生のたまり場である．隣りは用務員さん（当時は小使いさんといっていた）の仕事場になっていて，そこは茶飲みの場所でもあった．日本数学会にでた東大からの使用許可条件は，この部屋の一隅を使用することであった．私は学会の嘱託という名目で，助手となってからも，万般のことにかかわることになった．当時事務局員は田崎宏さんという人が一人で，この人については，あとで改めて書くことにする．最初，日本数学物理学会（以下，略称「数物」）の定款をなぞって，一通りの案をつくった．田崎さんが，熱心に綺麗な字で藁半紙を四つ折にして，丹念に書いたのを憶えている．こういうものは，何れにしても決まった形式があるようで，中身は殆ど記憶にない．従って現在のものとどの点で相違があるかも言いようがない．田崎さんの一つの記憶では，彌永先生が，これからの数学会がどうあればよいか意見がありますかとお聞きになり，それで「私などがあれこれ言うことはありませんが，ただひとつ普及ということも入れてほしいものです」と答えたそうである．普及という言葉はちゃんと入っている．もちろん先生が目を通され，文章やその他を直されて，設立総会（46年 6月）の定款案とされた．少し後になって，数物のように公益法人としての社団法人としたほうがよいということで，定款はそのために必要となる細部の変更が加えられた．この法人の監督官庁は文部省で，51年秋に何度か足をはこび，法人としての定款上の要件をきいたり，係の人に申請の書類を見て貰ったりした．認可は翌年 5月であった．最初の定款案と同時に細則案も作られ，支部，分科会の名前も，列挙された．支部名には変更はないが，数学

基礎論および歴史，トポロジーの分科会はなかった．前者は 47 年の年会の折，数学の基礎の会として現われ，講演のあと，数学基礎論分科会について協議がされた．後者は始め位相解析とよばれ，ついで位相数学となった．トポロジーとなるのは，ずっと後のことである．

以上はいわば機構のようなことだが，実務のほうは，現金の出し入れの伝票をはじめ，現金出納簿，費目ごとの仕訳帳そういうものを揃えることから始めたのである．要するに何もなかったのだ．

2．年会と分科会

第１回の年会は敗戦の翌年つまり 47 年の 6月，東京帝国大学（「帝国」が廃止されるのは47年10月1日である）理学部の教室で行われ，３日間であった．以後年会は 55 年まで東京大学で行われていた．年会のほかに毎月常会を行うことが，1884年の東京数学物理学会の成立（東京数学会社の改組）以来定められていたが，1945年には講演者が皆無であったり，空襲のため，常会は中止となった．私は数物学会時代の常会は体験外のことだが，東京数学会社創立 80 周年に際して年表を作った時にこれらのことを知った（「数学」9 巻 2号，1957）．数学会創立の 46 年は敗戦の翌年で，食料，交通，宿泊どの面からも，毎月東京で常会（例会）を開くことなど，到底不可能である．それで，秋に例会をまとめてやろうという発想が委員会で出されたように思う．それで秋季例会と呼ぶことにした．この秋季例会は，46，47年の秋は東大で行ったが，48年からは，秋月康夫教授（委員）の申し出で，京大で行われることになった．戦災で多くの数学教室が被害を受けただけではなく，都市そのものが，そういう催しができる状態ではなかった．そればかりではない，多くの数学者が，戦地や軍隊から帰還せず，幸い帰っても，住居や生活の確保が困難の世相であった．旧制大学の所在地では，京都だけが例外であった．私は幸い高槻市の友人の家に泊めてもらった．そのころの旅行では，配給の自分の米を持参するのが常識であった．

分科会としても，例会をしようにも，会員への通知は数学会事務局でやってくれなければ大変という事情もある．秋季例会は年会とは違って，全体の統一を求めることがいくらか乏しいというのか，たとえば応用数学分科会だけが，京大ではなくて紀州白浜の近畿大臨海実験所や山口大学で，しかも日を変えて行われたことさえある．

このころ，講演会場数を減らすと日数を増やさねばならない（５日間のこともあった）．いま言った様な事情で宿泊日数を増やすことは，個人にとっては苦痛なこともあった．反対に会場教室の数を増やすと，聞きたいものがぶつかって困るということを言ってきた方もあった．そのうち秋季例会といっても，年会と同じではないか，年会を年２回やるところ（学会）などはないという意見もでる．現在のように各種シンポジウムが盛んに行われる時代ではなかった．そこで秋は分科会（複数）の合同であるという辻妻合せをして，秋季綜合分科会と名づけ，プログラムの形式も分科会ごとまとめることにした．私の記憶では，勝手にそうしたのだが，実情に変化はないので，別に異論もなくその通りになった．

もう一つ，際立ったことがある．数物学会時代から，会報やプログラムは氏名は「君」付けであった．そもそもの名称は東京数学会社であった．いま会社というと企業のようだが，明治時代のそのころは Society の訳語であったろう，したがって社員（現在的用語では会員）は平等性がみられ，機関誌の記事では，氏名は「氏」付きであった．その後継が東京数学物理学会となり，その初期の記事には Kikuchi Dairokukun などと書かれている．

年会や例会のプログラムも数物学会の会誌のように，「君」付けとした．それは日本が敗戦直後の「民主主義」「平等」を大きな価値とする雰囲気にマッチしていた．そこで司会なり座長はわざわざ「君」付けで読み上げたようだ．それがいつしか「さん」となり「先生」ともなった．例えば「藤原松三郎君」と読み上げるのはいささか困ったかもしれない．しかし大真面目にそのように読み上げたのである．やがて時が移ると「君」はやりづらいということになる．「君」付けのプログラムは 55 年まで続いた．（物理学会のほうの機関誌ではこのような「君」付けを発足時からやめていた）．

懇親会がいつから始まったのか，正確な記憶はない．東大の山上会議所でやった．私は学生時代に本郷の農学部の北寄りの下宿屋でくらした．　今もあるおでん屋の「呑気」の筋向かいであった．この店のことは木下順二さんが「本郷」という著書のなかで書いている．学生時代にしょっちゅう食事に行ったり，冬は火鉢の火種を貰いにいった．そんな縁で，寿司折を頼んでみた．戦前からの鮨もいち早く復活させていたが，今では想像もできぬ，ものの乏しい時代で，はたして引き受けるかわからず，あたってみたのである．いまのようなバイキング風の仕方など知らなかったから，一緒盛ではなく折詰めである．これは申込人数より不足でも，余り過ぎてもこまる．遅れてきて「大丈夫ですか」という人も居る．「おおい醤油ないぞ」などとの声もかかったりして，事務局の人や手伝って下さる方は天手古舞で，気の毒であった．時には赤門前の「グリル　タムラ」のサンドイッチの詰め合せだったこともある．この時も個数が大変であった．あとで三村征雄教授が「福富君はタムラで顔なんだよ」と冷やかされたことがある．タムラはちょっとしたレストランであった．もののない時代に蛙のもものフライをたべたことがある．

３．機関誌のこと

機関誌“数学”の創刊については，“日本の数学１００年史”（同編集委編，岩波書店刊）の下巻に記され，第１巻第１号の「創刊にあたって」も紹介されているので省略する．

編輯が数学会で，岩波書店発行ということになっていた．戦前には新聞及び出版物の用紙統制があり，それは，言論を左右するものとなったと思うがその子細を私は知らない．その委員会は新聞および出版物用紙割当委員会となっていたが，ＧＨＱ（連合国軍総司令部）の命令で商工省から内閣直属に移管され，割り当ては出版物ごとということになった．用紙の量とか申請手続きなどは出版の素人の私たちでできるものではない．

47年 4月に創刊号ができるのだが，数学会は必要な一定の部数を岩波から購入し，

編集費を岩波から受け取ることになった．論文を集めたり，採否の決定は彌永先生を中心にした，編集委員の仕事で，私は原稿を整理して，岩波に渡し，校正をやった．あるとき活字の拾い違いか「領域」が「傾城」となっていて笑ってしまった．電算植字のいまでは，間違い方もちがった．

岩波のほうの係は根岸栄次さんといって，旧制八高から京大の数学をでた方で浅草の根岸興行の御曹司と間接に聞いていた．仕事の上ではしばしば時々言合いさえもしたが，中身は忘れた．

お金のことになるが，創刊号は64ページで 20 円．第 2号(60ページ)はようやく48年 3月にでて，定価は60円，第 3号は同年11月で 140円，第 4号は 49年 1月で160円．こうして48年には 2号，49年には 3号，50年には 2号しか刊行できず（ただし96ページ)，51年の第３巻以降になって，ようやく各年度４号（各号 64 ページ，定価 150円）となって，安定した．物価について，後に書くこととともかかわりがあるのでここに記しておこう．お米のことだが，標準米という白米10キロの値段が45(昭和20)年12月に 6円であったものが，翌46年には 3月に19円50銭，11月に36円35銭，47年 7月に99円70銭，11月に149円60銭という上昇である．このほぼ同期間に週刊誌は0.40円から 8円で20倍，銭湯が20倍という戦後インフレの進行中であった．（数字は「値段の風俗史」，朝日新聞社による）．

刊行の困難さも戦後のあらゆる面での生活の困難さに応じているわけだが，当時の社会事情を詳しく話すことが目的ではないからやめよう．

後に“数学”のバックナンバーを求められるときになってみると，どうも創刊号の20円はその後の号にくらべて，不釣り合いに安い．そこで定価100 円とゴム印を押した張り札をして販売した．このことについては，ほんとうなら岩波と協議すべきことだろうが，当時の事務主事の大久保実さんと相談をして勝手にそうしたのである．上に書いたような戦後インフレのしかも人々が食べてゆくことに大変なときだから，こんな大雑把をなんとなくしたように思う．今では到底考えられない．

この“数学”の内容的なことには，触れないが物理学会では，邦語の機関誌では，談話室と言う欄をつくりポレミックなものさえ載せているのをみて，羨ましい気がした．創刊号には，北川敏男さんが「近代日本数学史の編纂」という評論をよせたが，そのことを巡る議論や，その他の評論はこの誌上には現われなかった．いつであったか忘れたが，京大での大会のとき，委員会（当時は理事はなかった．）だったか，編集委員会だったかで九大の小野山卓爾さんが「“数学”をもっと面白いものにできないか？」と発言し，言葉を継いで「ＳＳＳの“数学の歩み”のように」といった．私は内心面白いと思い，突然のこの発言は浮いちゃうぞと感じた．ＳＳＳとは清水達雄，杉浦光夫，谷山豊さんらのやっていた新数学人集団のことである．

その後，物理のほうは邦語の機関誌の表紙に活字体でない書体で，Ｂｕｔｕｒｉとデザインなどをしてあたらしさを出そうとしていた．そんなわけで“数学通信”の発刊は嬉しいことである．事務的，啓蒙的なものには留まらず，ときにはポレミックな文章も載って，私たちの視野を広げる役にたってほしいと感じている．情報化時代といわれるが，コミュニケーションの問題はいつも念頭にあるべき重要なことであろう．

“Jounal”の刊行になって，海外の学会，大学と定期刊行物との交換をしなければと思い，これが日本数学物理学会(Physico-mathematical Society)の Proceedingsの数学部門の後継誌という内容の手紙を彌永先生にかいてもらい，あらゆる処に発送した．その前，48年に，Ann. of Math の42年以降が送られてきた．アメリカ数学会からは，50年始めに，Transactions と Bulletinの戦争中のバックナンバーがずっしりと段ボールの箱でおくられてきて，感動した．これらが利用可能にするために，そのさまざまな準備が必要となった．ついでに蔵書目録を作ることにし，“数学”にも載せ，後に別冊の蔵書目録も印刷した．当時は新着の Ann.of Math. などは，日比谷のアメリカ文化センターの図書館で閲覧したものである．あるとき付近が騒然としていたが，52年の血のメーデーの日であった．

53年秋に来日滞在した C. Chevalley 教授の講義を数学会の出版物とすることになり，シリーズ“Pubulications” の第１号となった．初めて表紙のデザインをしてみた．素人だからなにかの真似をしたのだろう．前記の“１００年史”の p.194 に写真がある．綺麗な緑色であった．ついでにＢ６版４ページの広告をつくり，そのデザインもして海外への交換誌にはさみこんだ．現物が手元にあったら，図版として載せてほしい位に気にいったものができたと今でも思っている．

雑誌の原稿執筆規定・要領をつくった．それは，多少の変更をみたが，今のものとあまり変りがない．Journal の規定 Ann.of Math.のをまねた．著者校正の要領がまちまちなので，校正用の記号や校正見本の図版を作った．これは今もそのまま現存して会員名簿の末尾についている．

４．財政のこと．事務主事の人たち．

数物学会の解散，分離決定（1945年12月）時の数学，物理出身者数（それぞれ592名，1812名）に応じて，数物の財産を 1：3 にわけた．記録によれば株式を除いて，数物の当面処分可能な預貯金，現金は総額45554円67銭であった．会費のことだが 46年に 60円，47年には半期 60 円としそれが 48，49年に年額 800，1200円とあげて，53 年に1800円となって，しばらく安定した．賛助会費を 1口 400円としてその募集を始めた．47年，私は小松勇作さん（講師）と共立出版を訪れ，南条初五郎社長にあった．南条さんの言ったことが印象深い．「今までは大学の先生のおっしゃるままで，ご無理なことも承って仕事をしてきましたが，これからは対等の立場として，ご一緒に仕事をさせていただきます」．これは，もっともなことで，敗戦後の雰囲気をただよわせていたのである．共立出版の数学やほかの理学，工学関係の出版は，岩波とならんで有力な位置をしめていた．結局 25口の賛助会員となり，それは当時としては大きな金額であった．

最初の主事の田崎さんが 1年ちょっとで，辞任され，つづいて何人かひとが主事となったが，どなたも短期間でやめてゆき，事務員の人も同様によく変った．大久保実さんが主事となって，漸く腰を落ち着ける人になった．どんな短期間であろうが，期間に応じた退職金を支払わねばならない．退職金をプールしておかねば，いざという時支給にことを欠く心配がある．退職金引当金という口座をつくることにした．予算案の原案にその項目を作ったが，こういう制度を知らないある委員から

の異論がでた．学会じたいが経済的に苦しいのに，そんな必要はない，その人が各自それに見合うものを，積み立てたらすむという委員の方さえいた．これは，いうまでもなく常識的なことと思いながら，この制度は事務の人への優遇措置でなくて，数学会の用意であり，利益でもあるのだと必死に説明した．しかし現在のような超低利息の時代では，その効用はどうなっているのだろうか．

このたぐいの記録では，実務を支えている人びとのことが脱落しがちであるので，二三の人に触れることを許してほしい．

まず，とても若いときから物理学教室の図書室にいて，41年からは数物学会の事務を執った望月誠一さん．学会の生き字引で，物理学会の主事となり．機関誌の編集人としても名前が出されていた．数学会の独立後も，分らぬ実務はいつもこの人に教わった．

始めに書いた田崎宏さん．戦時中参謀本部で陸軍の暗号製作とその防御の部門に，戦後九大，金沢大，東京女子大などを歴任した，故山本幸一さんがいた．末綱先生のところで，解析的数論をやり，ついでラテン方陣やコンビナトリックスを研究していた．田崎さんも，同じ部署で，いわば技官のような仕事をしていた．正規の数学教育は受けていなかったが，独自といったらいいのか，自家用に作った概念を道具にして，ラテン方陣の暗号製作への応用などに取組んでいた．たとえば自己流道具の一つは標準偏差のようなものであったと，後に知ったという．（陸軍の暗号研究と数学科とのつきあいについては，数学セミナーの 96年3月号に彌永先生が「私の戦後５０年」という表題で書かれて，私が注をつけた一文のなかにある．なお，数学会や数学辞典編集の発足についてもしるされている）．田崎さんは家族をかかえて，経済的困難もあり， 1年とちょっとでやめることになった．機関誌のところでインフレのことを書いたが，このころ 8年間で味噌，豆腐，バター，銭湯など５０～７５倍になったことが前記の「値段の風俗史」でわかる．ものによっては，月々倍になる食品もあった．若い公務員の初任給が 540円であった．数学会の給与は月 300円ほどで，公務員給与や賞与にいくらかでも近くと考えるようになったのはずっと後のことであった．

次の人は森田昭一さんといって，東京物理学校（いまの東京理大）の二部にかよっていた若いひとであった．つづいて松村さん，鷲尾　登さん．ようやく大久保実さんとなって，腰を落ち着けた人となった．理学部の事務官のたれかの紹介であったように思う．自宅が本郷菊坂で，府立一中（現日比谷高）に歩いてかよった．昭和初期にたしか慶応の理財科を出たときいた．戦争中は陸軍省にも勤めたとのことであった．几帳面な字を書いた．このころ，会員の会費台帳（これは現在も踏襲されているのではなかろうか）や理事会，各種委員会の記録用紙を作った．大久保さんが会議のメモをとり，案を作って担当委員の検印をもらった．やはりこれらの記録は印刷に付すべきだったが，“数学”の会報欄の紙面も，独立した会報をつくる財政的余裕も乏しく，散逸したのは残念である．

私が東大を去ってからも，時折大久保さんから仕事や，会のことで相談を受けたり，遊びにいってはいたが，大久保さんは 67年 11月のある夜，理事会の帰途，東大の前の歩道で倒れ，帰らぬ人となった．突然の胃穿孔であった．数学会の勤務は

十数年にもなっていた．逝去の記事を“数学”で探したが見あたらなかった．見つけた方は教えてほしい．

主事のほか，会員の入退会，会費の管理，その他の出納の事務をとるひとが一人（女性）おられ，ここに記したいが，それについての十分な準備ができなかった．そのころは仕事のほうの担当も未分化でやって行ける規模の時代であった．今回これを書くにあたって，彌永先生は別として前記の望月，田崎両氏ほかの人とは連絡のとりようがなかった．ちょっとだけ，私自身に触れたい．米暗号解読で比島に派遣されたが，やがてマニラを脱出するはめになり，ルソンの北端まで徒歩やヒッチハイクで辛うじて逃げたりして，結局運よく東京に舞い戻った．敗戦を迎え，郷里の樺太には帰れず東京に留まっていたのである．

５．数学辞典のこと

これは数学会の発足と不可分のようにして，始められた．辞典の編集の発足，発行，改訂などについては前記の“１００年史”（下巻 196-197ページ）に簡略にしるされている．編集委員会に出席したこともあるが，若僧の私は拝聴しているだけである．１００年史に「体系の調整，用語の不統一，相互引用の不備を補うなど，予想していたより，はるかに手間がかかった」とだけ記されているが，かかった「手間」を引き受けて，したことを具体的に書くとすれば，どれほどのスペースが必要になるだろうか．

原稿の収集も楽なことではなかった．彌永先生は原稿のすべてに目を通して，体系の調整や，内容や文章のチェックをされた．私も全部読んだ．数学上の術語やもっと一般の用語もそろえる必要がでてくる．当時はまだ確定されていない，日本語の術語もあった．ビコンパクトという言葉が生きていた時代である．用語の統一というのは，目と記憶と手で作業するしかなかった．人名や術語の索引など，パソコン時代となった今では想像もできないことであろう．カードを設計して，記入分類していった．この膨大な仕事をしてくれる人も見つかった．

原稿用紙も専用のものを設計して，岩波につくってもらい，東京女子大の学生さんがいわゆるバイトの筆記生として通って，浄書した．これらの仕事の，岩波側の担当に稲沼瑞穂さんという方がいたが，実務は東京工大出身の美坂哲男という人で，仲良くなった．彼は日本の温泉全部に入るということで，温泉案内で，テレビや，山岳，旅行の雑誌で著名である．

辞典に戻ると，雑誌や叢書の解説をかいた．前者は43種，後者は14種だからできたようなものである．辞典の凡例はどれにもあること，こちらは一応の原稿をつくり，彌永先生が作られた．記号とその簡単な説明，本文中の所在を表にしようと思い付いた．それは末尾の索引には入れにくいので，記号表は冒頭に置いた方が役立つと思い，そうした．この方式は現在の版にもある．雑誌・叢書名の略記表も前の方に置いたが，これは現在では後ろにまわった．また小項目の辞書ではないから，部門別の項目表を目次のようなものとして作ることにした．そうして辞典のフォーマットにかかわるものをつくったのである．これらは一々彌永先生に，ご相談したが，自由にやらせてくださった．記号表と部門別項目表は当然のことだが，悪いア

イディアではなかったと思っている．

しかし，77年にＭＩＴによる英語版をみて，見出し語のたてかたをはじめ，フォーマットに全く新しい方式をみて，さまざまな進歩に感心してしまった．それは第４版に継承され，大変引きやすいものとなっている．

術語の邦訳のことだが，一つだけ反省を記しておきたい．それは“ exact sequence ”のことである．これを小松醇郎さんの原稿では精密系列となっていた．感じはわかるが精密というのが，何とも落ち着かぬ気がした．そこで私は，完全系列とすることにした．内心は「どんぴしゃり系列」だなと思いながら，こういう命名を主張する勇気はなかった．この訳語を提案したところ，河田敬義さんは賛成であった．それで河田，竹内外史さんの共著の“位相幾何学”（朝倉書店）はこの辞典より早く出版されたのだが，完全系列が使われている．これは私の作ったただ一つの訳語だが，完全何何という用語はたくさんあり，意味するところや用法はまちまちである．いま一つの提案をするとすれば，「的確系列」というのはどうだろうか．やはりまだ「どんぴしゃり」には，内心こだわるところがある．

６．おわりに

送られてくる会報，総会の予算案，決算書をみると，規模の違いに驚くのである．始まったころは，いわば個人商店といった規模のようなものであったといえよう，インフレの時代のいわばやり繰りのようなものもあったが，生活の困難さはあっても，現在の社会の奇妙な焦燥感，閉塞感のない陽気さもあったように思う．だからいろいろの苦労を書くようにという注文であったが，苦労話にはあまりならなかった．

大学といった世界しか見ない，「先生」がたで自分の狭さに気付かない人もなくはなかった．それはどのような世界でも当然であって特に言うこともない．大久保さんなどが，傷ついたこともある．しかしいつも事実上の中心におられた彌永先生の，事務員にたいする寛容さが，事務局における安心感を生み出していたのだと思う．

お仕舞いに，私は小学校以来，直接教わったり，講義を受けた先生の他は，先生とお呼びしないし，先生と呼び合うことが嫌いなので，失礼もあったかもしれないと，ちょっと気にしたところもある．

（ふくとみ　せつお）